



豪州大使らも参加して1月に行われた壮行会（横浜市都筑区）

## 豪留学で「果敢に挑戦を」

### 東京都市大 1年生206人が参加

横浜市都筑区にキャンパスを持つ東京都市大が、学生に「英語で学び、考え、議論できる」力を習得させるため、「東京都市大学オーストラリアプログラム」(TAP)を導入した。第1陣は現在、豪州西部のパーズにあるエディスコウワン大(ECU)で5か月間の短期留学に臨んでいる。横浜キャンパスで1月に開催された壮行会では、駐日豪州大使のブルース・ミラーさんが「果敢な気持ちを忘れず、様々なことに挑戦してほしい」と激励した。

(加藤干城)



教育ニュース

TAPは国際人の育成を狙いとした東京都市大独自の留学プログラムで、1年生206人が参加。準備教育を受講した後、5か月にわたりECUで語学、教養

科目を勉強する。準備教育ではTOEIC550点以上を目指し、ネイティブ講師による1日2時間のレッスンを100日間受講するほか、留学準備研修会でも学ぶ。

ECUで過ごす時間のうち、前半は英語を学習し、後半は英語で教養科目を受講する。参加者はECUの

学生寮でも英語漬けの日々を送り、帰国後はTOEIC650点、卒業時には750点を目標にしている。大学は費用の一部を補助したり、奨学金制度を設けたりして学生をサポートする仕組みだ。第1陣122人は今月3日に出国し、6月に帰国する。第2陣84人は8〜12月にECUに留学する。

三木千壽学長は1月の壮行会のあいさつで「TAPには私の苦い経験が詰まっている。34歳で米国の大学にポストドク(ポストドクター)として行ったが、これでは遅い」と話し、「都市大は世界のどこでも活躍できる人材を出したい。思いっきり勉強し、豪州を楽しんでほしい」と期待感を示した。

ミラー大使は「19歳の時、

日本に1年間留学した。耳に入る言葉が英語から日本語になり、大学では日本の近代文学への興味を深め、夏目漱石や森鷗外の小説をじっくりと読んだ」と自身の体験を披露。そのうえで、「豪州は移民とともに発展してきた国。価値観の多様性に気づき、そのなかで対話と経験を重ね、視野を広げていくことが大切だ。留学体験は私の今の仕事に生きている」とエールを送った。

メディア情報学部1年の奥村真帆さんは「様々な国籍を持つ友達をつくり、帰国後は豪州で培ったものをTOEICなどで形にした」と決意表明。「将来は海外で働きたい。日本と海外の懸け橋になれるように留学期間を大切に過ごしたい」と抱負を述べた。